

保育における実践研究の意味について

伊藤 能之

Reserch on the significance between theory and practice

帝京短期大学こども教育学科

Yoshiyuki ITOU

1. はじめに

「本研究は、理論は保育にどのような意味をもつか、について論考するものである。保育を学ぶ学生においては、実習が大きな意味を持つ。実習における実践を通して学生が大きく飛躍する。このように保育のように実践を重視する分野において、理論研究の意味づけを考えることは意味があると考え。今回のこの論考では、その視点を提示していきたい。

理論という言葉を広辞苑で引くと、「実践を無視した純粋な知識。この場合、一方では高尚な知識の意味であるが、他方では無益だという意味のこともある。」とされている。また、大辞林には「もともと理論とは実践に対し否定的意味合いで使われることが多い」とされている。このように、理論とは、常に現場と比較され、その都度机上の空論として否定的に見られていることもある。実践の科学たる保育および看護の世界ではこの傾向はいっそう強調される。学生の实習後の感想にも、現場が理論通りには進められないとの指摘もある。

また、いくら実践と理論の間に隔たりがあるにしても、この二つの関係は切っても切れないものである。保育においても看護においても、自分の実践がどうであったのか振り返り、反省し、評価する際に理論は欠かせないものである。理論があるからこそ、自信を持って実践ができ、またそれを振り返ることもできるという一面は無視できない。理論を学び、新たな知識を得たことで、実践の場での意識が変わり、その意識を持ち続けることで実践にも変化が出たという経験を持つ。もちろん理論で得た知識が絶対的にすぐ現場で生かせるというわけではないが、その知識を“知っている”ことと“知らない”ことの差は大きく、理論によってもたらされる意識の変化は、経験と共に実践の変化へつながる可能性は高いと考えられる。

まず、理論は保育者が実践をする上で、大海におけ

る羅針盤のような役割を果たす。特に新任の保育者にとって、いきなり担任を任されることは何も持たずに大海に放り込まれるような心境であり、そんなときに、理論は保育者にあるべき道を提示し、安心感を与えるであろう。そして、自分の保育を振り返り、評価する際にも理論は大きな基準となり、より正確な評価が可能となる。このことは自分の保育を内省する上で非常に重要であり、保育者の能力の向上にもつながる。実際に理論に基づくことで、アセスメント能力も向上し、保育の質も高まるであろう。そしてその向上もまた、理論に基づいた自己の評価によって自覚することができ、自分が理論に基づいた、意味のある実践をしているという自信につながる。このように実践をしては常に理論に立ち戻るというサイクルを繰り返すことで、道を踏み外すことなく、確かな力を身につけることができるのである。また、理論に基づいた保育を行うことは、保育の専門家としての意識を高め、保育者の喜びにもつながるであろう。このようにして理論は現場に貢献することができる。貢献するという意味では新たな理論を提示することは学問としての保育学にも貢献でき、非常に価値のあることである。

理論が入ることで、保育者は自己評価がきちんとできるようになり、アセスメントも整備され、一人ひとりの保育者が自己の保育に確信が持てるようになることが期待される。保育者一人ひとりが、常に戸惑いながら保育するのではなく、自信を持って保育できることはとてもよいことである。その自信も根拠の無いものではなく、理論に裏づけされているとなればなおさらである。自信を持てるような保育をすることは、保育者冥利としての喜びにもつながる。理論が、保育者が道に迷うことがないように導き、また、迷ったときには助けになれるような、いわば大海における羅針盤的な役割を果たすことができれば、それは素晴らしいことである。

2 役に立つ理論とは何か

なぜ、理論が必要か。それは実践のレベルが理論により上がるからである。逆に言えば、実践に役立ち、実践のレベルが上がる理論でなくては意味がないとも言える。ただし、「役に立つ」「レベルがあがる。」という言葉にも注意が必要である。

このことを保育と同じ実践性が求められる看護を例に考えてみる。

看護のような実践科学では実践に役に立つ理論という面が強調される。それはともすると、即効性が求められる。現場にすぐに役に立つことが求められる傾向にある。そして、抽象的な問題のみ取り扱った理論は役に立たないと切り捨てられる傾向がある。この点について哲学者の中岡からの指摘がある。

現場もしくは臨床から、どのようなことば（理論、知）が要請されているのかは、繰り返し確認すべき事柄である。例えば看護のために必要なのは、普遍的理論・学知（そのもの）ではなく、眼前の患者さんを直ちにケアする具体的な知・方策だといわれる。この点から考えた場合、「理論は使い捨てで構わない」とさえ言い切りたくなる。今・ここで有効な知に参与するために、迂遠な形而上学、ことばを紡ぎだすためだけの思考と絶縁したくもなる。しかし、ここで立ち止まって、理性的動物である私たちが〈具体と抽象〉にどのように関わっているのかについて、しばし考えをめぐらしてみることが、臨床哲学の哲学性を高めるためにも重要であろう。それは先ほど現場と現場性について述べたこととも重なる。ヘーゲル『精神現象学』の感性的確信における今・この弁証法に全面的に賛同しないまでも、今・この直接性（私にとって、私たちにとって）が言語的普遍性つまり媒介性とやはりどこかで結びつくことは認めざるをえない。眼の前の患者さんの今起こっている苦しみに対応する。それはいかなる抽象の余地も必要もない、具体性への密着と感じられるかもしれないが、はたしてその通りであろうか。⁽¹⁾

つまり形而上学は看護などの現場では役に立たないと疎まれる傾向を指摘している。

しかし、私はこのような傾向を理解しつつも、強く異を唱える。理論には即効性のある理論もあれば形而上学的に即効性を持たない理論もあり、そのどちらも

必要であるというのが私の考えである。現場からの即効性を求める声には即効性のある理論を提示し、抽象的な概念が必要とされるときには、そのニーズに答える。そういう対応によって理論は意味を持つと考えられる。たとえば、前章ですで見たところであるが、看護の現場では哲学が求められている。看護のような実践科学と哲学は密接に結びついている。看護のような人間の生と死に直面する現場では、「生きるとは何か」「死とは何か」などの重い問題が常に降りかかる。このような問いに答えるために哲学の力を借りる場面がある。しかもその関係性が非常に深い。このような場合、必ずしもスキルとして哲学が役に立つわけではない。そもそも、すぐに答えが出せない問題。そして、場合によっては永久に正解が出せない問題も含まれる。こういう問題を考えていくことも理論の役割であり、必要であると言える。このような解きえぬ謎に向かうことによって、看護の質があがることも十分にあり得る。そのことは、前章にて西村ユミの植物状態患者への看護実践とメルロポンティの現象学との関係でみてきたとおりである。中岡は前述の自ら投げかけた疑問、つまり、いかなる抽象の余地も必要ない、という声に対して「はたしてその通りであろうか」という疑問のあとに以下のように続けている。

看護を含めた対人ケアは、人間とは何か、人間のニーズとは何か、生命の貴重さはどこにあるのかについての認識を基本的には前提して行われている。忙しい臨床では、死生観そのものを問い直す余裕はないであろう。そのぶんだけ根強く、無反省に、ステレオタイプ化した死生観が幅を利かせがちなのであって、個々の医療者が個々の場面では疑問を感じても、患者さんの具体的な症状や希望に対応した軌道的な医療・ケアは困難なのが現状であろう。いいかえれば、ベッドサイドにおいては、そのように信じられているほどには具体性への密着は存在せず、むしろ形骸化した死生観への囚われ、硬直した〈理論〉へのもたれかかりがより支配的なのではないかと思われる。「いや、私は理論には振り回されていません」というなら、それは自分が一定の世界観や人間観（つまり基本的な理論）を暗黙のうちに採用していることに無自覚だけではないだろうか。だとすると、必要に応じた理論の修正・変更を受け入れられないだけ、そのような人は〈抽象的〉だといわなければ

ならない。

ずばり、「ケアの対象はほんとうに〈人間〉であるのか」と問うてみてもよい。人間とは私たちにとって自明・直接的であるようでいて、じつはきわめて多様で、つかみがたい存在である。患者さんを「対象」と呼ぶ看護界の慣例は、冷たい科学主義の印象を与えるし、かなりの程度までその印象は事実裏づけられているのであろう。そこで全人的なケアを訴えることは、方向としては誤っていない。しかし、データをもとに診断をはじきだすだけではなく、生身の患者さんの声に耳を傾けようとしたとき、戸惑いは依然としてついてまわるように思われる。(2)

つまり、忙しければ忙しいほど、現場からの要請が強ければ強いほど、あえて抽象的な問いかけが必要なのである。それは、たとえば、上記に示されたように、「ケアの対象はほんとうに人間であるのか」などという問いが必要なのである。日々の仕事に追いまわられている現場の看護婦たちにとって、「ケアの対象は人間だけでいいの」などと問いかければ、「私は、今、現在、苦しんでいる患者を目の前にしてその対応に追われている。犬や猫もケアの対象になるかもしれないし、ならないかもしれない。しかし、それどころではない。そのような問いを考えている場合ではない。」などと答えられるのがオチであろう。このような現場の声ももっともなように聞こえる。しかし、生や死という重要な局面に立ち会っている人間がこのような問題を考えないのは困る。このような問いの作業を続けることによって、看護の独善化を防ぎ、また、その一方で看護の質をあげるのである。

3. まとめ

今回の論稿では、なぜ、看護との相関より、理論の意味づけを行った。今後は、看護との比較により、さらに、保育における理論の意味づけを行いたい。そして、保育実践に適用していくには、どのような理論が必要かについて考察していきたい。

引用文献

- (1) 中岡成文 ケアする欲求、欲求するケア—臨床哲学のために メタフュシカ 第30号 1999年 2月 大阪大学大学院文学研究科哲学講座 p. 147

- (2) 中岡成文 ケアする欲求、欲求するケア—臨床哲学のために メタフュシカ 第30号 1999年 2月 大阪大学大学院文学研究科哲学講座 p. 147